

昔々、男と女がいてひとりの子供をもうけ、ムイナ・ファティマと名付けた。母親が亡くなった後、子供は父親に、何故再婚しないのかを尋ねた。父親は、新しい妻が子供を愛さないことを心配して、再婚したくないのだ、と答えた。そうはいいながらも父親は、結婚相手を探しに行こうと子供に言った。

子供は父親と一緒に、削ったココヤシの実〔容器〕を持って、最初の家の扉を叩いた。

「誰かいますか」。

「お入りなさい」。

「火を貸して頂けますか」。

彼女は、家の中で住人たちが食べ物について話しているのを見た。彼女は〔火を借りて〕燃えている炭を山盛りにしたココヤシの殻を持って外に出た。その上に小便をしてから同じ家に戻ると、住人たちが食事をしている最中だった。彼らは彼女も食べるように誘い、彼女は食べる前に、ココヤシの殻を食べ物で一杯にした。

「何をしているんだい？」。

と聞かれて彼女は答えた。

「父さんに少し持って行こうと思って」。

住人たちは彼女の父親の分を作ってやり、彼女がそれを父親のところに持って行くと、父親はちょっと調べてから言った。

「この家には再婚相手はいない」。

娘は、同じことを何度も違う家で繰り返していたが、或る日、彼女が料理を父親に持って行くと彼は言った。

「この家に再婚相手がいる」。

父親はそこの女性と結婚し、子供をもうけ、モイナ・ファティマと名付けた。或る日、父親が旅に出た。継子のことを好かない継母は子供を溝に放り込んだ。父親は旅から帰って、娘がどこにいるかと聞くと、継母はと答えた。

「あの子は外にでかけています」。

「あの子はどこなんだい？」。

と父親が聞くと、継母が「あの子は町に出かけました」と答えた。

娘の妹が厠に行くと、姉が歌っているのが聞こえた

「おまえの母さん、お前が嫌い。〔便所の〕溝に私を放り込んだ。熱いお湯を私にかけた」。父親が厠に行くと、娘を溝から引き上げると、娘の下肢は腐敗していた。父親は指を唾で湿らせて、それを娘に塗ってやった。